

博士号取得者

研究テーマ	内 容	発表方法, 媒体 (研究誌名, 研究会等 名)
「コースの位置、グリーンバーグの位置」	1960年代末期アメリカにおけるコンセプチュアル・アートの成立とフォーマリズム理論との関係を、両者の理論的構造を対照分析するとともに、その両者においてデュシャンのレディ・メイドがどのように解釈されて文脈化されているかを分析し、そのイデオロギー的連関を考察した。	『研究紀要』(京都大学文学部美学美術史学研究室)第18号 平成9年3月
「与えられたとせよ 1.芸術作品 2.マルセル・デュシャン」	マルセル・デュシャンの遺作《与えられたとせよ 1.落ちる水 2.照明用ガス》を巡って、デュシャンが取った制作秘匿と写真撮影禁止という身振りが、「作家によるオリジナリティーの否定」というそれまでのデュシャン解釈に対して与えた問題を考察。	『美術史』(美術史学会学会誌)第144号 平成10年3月
「記述するデュシャン / 記述されるデュシャン - 1930-40年代を中心に -」	1930年代から40年代にわたって、キュビズム、ダダイズム、シュルレアリスムそれぞれの文脈におけるデュシャンについての記述の差異を分析し、当時ソシエテ・アノニム・コレクションについての作品記述を行っていたデュシャンの語り口を比較検討することで、当時の「美術作品」の規定要件がいかなるものであったのかを考察した。	『研究紀要』(京都大学文学部美学美術史学研究室)第21号 平成12年3月
「ポップ・アートとレディ・メイド - vulgarityの表象を巡って -」	アメリカのポップ・アートが登場した1960年代における批評言語を分析することで、日用品や既存イメージを使用したポップ・アートとレディ・メイドを連結する方法論について考察した。特に、批評言語に頻出する「Vulgarity」の分析を軸に、「通俗さ」と「芸術」の接続と価値判断との関係性を考察した。	『美学』(美学会学会誌)第204号 平成13年3月
「1970年代アメリカにおけるマルセル・デュシャンの受容の様態について」	コンセプチュアル・アートが全盛を迎える1970年代アメリカにおいて、デュシャンのレディ・メイドについての解釈は大きな転換を迎える。実作品の視覚的存在よりも不可視の概念を重視する当時の美術の文脈において、レディ・メイドや《大ガラス》が神秘思想と結びつくといった、デュシャン受容の様態変化について考察を行った。	『鹿島美術研究』(鹿島美術財団研究報告)第21号別冊 平成16年11月

「戦後アメリカ美術とデュシャン受容の言説の関係」	1940年代から1970年代までのアメリカ美術の文脈におけるデュシャン受容の様態の変化を分析するとともに、シュルレアリスム、ネオ・ダダ、フルクサス、ポップ・アート、コンセプチュアル・アートといったデュシャンの影響下で出現したとされる各動向が、どのようにデュシャンを解釈し、当時の文脈における自らの位置測定を行ったかを詳細に分析した。それらの分析を通して、デュシャン、とりわけ彼のレディ・メイドが美術の分野で切り開いた可能性と、それぞれの受容の限界を考察した。	課程博士号取得論文 (文学・京都大学) 平成16年1月
「マルセル・デュシャンの身振り - 泉 を巡って - 」	1917年、アメリカ・インディペンデント展に応募されて論議の的となった《泉》の顛末を詳細に分析し、それがレディ・メイドの方法論を公にする意図によるものではなく、デュシャンがインディペンデント展の運営主体から身を引く戦略であったことを明らかにした。	日仏美術学会例会 平成8年3月
「与えられたとせよ 1. 芸術作品 2. マルセル・デュシャン」	マルセル・デュシャンの遺作《与えられたとせよ 1. 落ちる水 2. 照明用ガス》を巡って、デュシャンが取った制作秘匿と写真撮影禁止という身振りが、「作家によるオリジナリティーの否定」というそれまでのデュシャン解釈に対して与えた問題を考察。	美術史学会西支部例会 平成8年9月
「ポップ・アートとレディ・メイド - vulgarityの表象を巡って - 」	アメリカのポップ・アートが登場した1960年代における批評言語を分析することで、日用品や既成イメージを使用したポップ・アートとレディ・メイドを連結する方法論について考察した。特に、批評言語に頻出する「Vulgarity」の分析を軸に、「通俗さ」と「芸術」の接続と価値判断との関係性を考察した。	美学会第50回全国大会 平成11年10月
「画家であること、ダダであること - 1950-60年代におけるマルセル・デュシャンとジャスパー・ジョーンズの評価 - 」	1950年代から60年代にかけて、アメリカにおいて起こったダダの再解釈ならびにネオ・ダダの登場を考察対象とし、解釈の地平においてデュシャンが「画家」としての地位を奪われ、「ダダ」に変貌することと、ジャスパー・ジョーンズが「ネオ・ダダ」として出発しながら「画家」として受容されるに至ることとを比較分析しながら、当時の「美術」の枠組みとイデオロギーを考察した。	美術史学会全国大会 平成17年5月
「ファッション / アート / 建築の間から」	今日のファッションとアートと建築を取り巻く状況を、それぞれの専門的な視点から分析し、領域間の交流や侵犯について討議を行った。パネリスト：成実弘至、後藤武、平芳幸浩	京都芸術センター 平成16年6月

「デュシャンと現代美術の保存・修復をめぐって」	現代美術における保存修復の問題点を、美術館学芸員、美学者、修復家、美術作家、それぞれの視点から考察し、討議を行った。季刊『インターコミュニケーション』第14巻第2号（平成17年4月発行、NTT出版）に再録。パネリスト：マリオ・ペルニオーラ、岡崎乾二郎、谷村博美、平芳幸浩	国立国際美術館 平成16年12月
「大阪万博：前衛の滝壺」	連続シンポジウム『野生の近代 再考 - 戦後日本美術史』の1セッションとして開催。大阪万博実現における当時の前衛作家たちの参画を巡る問題を討議。パネリスト：榎木野衣、小田マサノリ、平芳幸浩	国立国際美術館 平成17年11月
「語りとしての二つのデュシャン展をめぐって」	シンポジウム『なぜ人々は物語なしに生きていけないのか - 多メディアの中の物語の発生・展開・終焉 - 』における基調講演。国立国際美術館と横浜美術館で開催された「マルセル・デュシャンと20世紀美術」展の展示構成を比較検討することで、展覧会における「物語」の発生と解体の問題について考察を加えた。パネリスト：北山研二、ドミニク・シャトー、平芳幸浩	成城大学 平成17年11月